

社会福祉とフェミニスト平和・安全保障の繋がり

——ジェーン・アダムズの福祉実践と平和運動

相方 未来

はじめに

私たちが暮らし、生きていく際に必要とするものは、それが不可欠であればあるほど、私たち個々人の生活に身近であるはずだ。ならば、暮らしや生活にとって欠かすことができない安全や安心に関わる議論も私たちの日々の経験と連続するものであって然るべきだろう。

一方、現在の国際政治では、安全保障の議論は国家間関係を念頭に置き、国家を中心に議論される。その枠組みでは、個人の生命や安心・安全な日常生活を送る上での必要を満たすことは安全保障の問題と想定されず、また、個々人の社会保障よりも国家のための安全保障が優越するということが起こり得る¹。こうした国際政治の平和・安全保障では、国家が保護する主体であり、国家の領土・国民を守るために必要とされるのは軍事力である。そのような軍事力による国家安全保障では個々の人間の存在や、それらの人々の生活を支えるニーズへの意識が途端に希薄になってはいないだろうか。実際に、軍事力に偏重した国家安全保障政策の影響で個々人の安全保障が脅かされるという問題が数多く指摘されており、ジェンダー視点から安全保障の脱軍事化を求める、女性達の国際的な運動も行われている²。そうした問題を抱えつつも、現実主義に立つ、軍事的国家安全保障は国際関係を論じる際に長らく支配的な言説であり続けている³。

現在、フェミニスト平和・安全保障と分類されている議論は、平和研究におい

-
- 1 Betty A. Reardon, "Women and Human Security: A Feminist Framework and Critique of the Prevailing Patriarchal Security System" in *The Gender Imperative: Human Security vs State Security* (London: Routledge, 2010), 10-11, 16-17; Ann Tickner, *Gender in International Relations: Feminist Perspectives on Achieving Global Security* (New York: Columbia University Press, 1992), 28.
 - 2 秋林こずえ「ジェンダーの視点と脱植民地の視点から考える安全保障——軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」日本平和学会編『「安全保障」を問い直す』（早稲田大学出版部、2014年）、51-68頁。
 - 3 松元雅和『平和主義とは何か——政治哲学で考える戦争と平和』（中層公論新社、2013年）、138頁。

て1960年代から蓄積されてきた。それは、女性の価値観や生活経験による認識論とジェンダー分析を重視することによって、軍隊や軍事力を保持せず、行使もしない平和・安全保障のあり方を目指すというものだ⁴。そして1980年代以降、より体系的かつ活発に議論されてきたフェミニスト平和安全保障研究は国家安全保障という支配的な言説や政策に疑問を投げかけた⁵。

本稿では、フェミニスト平和・安全保障の議論を枠組みとして、従来、同じ枠組みにおいて論じられることが少なかった、社会福祉と平和・安全保障の両概念がどう接続できるのかを検討し、その答えを探りたい⁶。

それにあたり、本稿では、社会福祉と平和という両者の運動に深く関わり活動した、アメリカ合衆国のフェミニスト、ジェーン・アダムズ (Jane Addams) の実践に注目する。本稿では、一番ヶ瀬康子による定義に倣い、福祉を「幸福を一人ひとりが追求するための基盤であり、その機会また条件となる生活そのものの努力」と捉え、アダムズやその同僚たちによるセツルメント運動、ハル・ハウスでの実践を福祉実践と表記する⁷。アダムズらの福祉実践は、福祉が社会制度化された今日の社会福祉の前段階の社会事業と見なされる。この社会事業とは、また、その前段階の宗教と関わりの深い慈善事業やヒューマニズムに基づく博愛事業のボランティアな福祉実践から「人びとの生活問題への社会的対応」へと発展した段階でもある⁸。ここでは、アダムズの福祉実践の分析から得られた概念を、今日の社会福祉の形成過程との関係を踏まえ、社会福祉の概念として考える。

4 Tickner, *Gender in International Relations*, 22-23; Ann Tickner, *Gendering World Politics: Issues and Approaches in the Post-Cold War Era* (New York: Columbia University, 2001)

5 Barry Buzan and Lene Hansen, *The Evolution of International Security Studies* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009); Annick T.R. Wibben, *Feminist Security Studies: A Narrative Approach*. (London: Routledge, 2011), 5.

6 ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung) が1969年に提示した「構造的暴力」の概念を用いて、福祉学と平和学を合流させようと試みた論考は既にある。しかし、その神川の議論にジェンダーの視点や当時まだその端緒についたばかりのフェミニスト研究者の議論は含まれていない。神川正彦「福祉世界の形成に向けて—「福祉学」と「平和学」の合流」『季刊社会保障研究』22 (2) (国立社会保障・人口問題研究所、1986年)、97-106頁; Johan Galtung, "Violence, peace, and peace research," *Journal of peace research* VI, No. 3. (PRIO publication, 1969): 167-191.

7 一番ヶ瀬康子『一番ヶ瀬康子社会福祉著作集 社会福祉とはなにか』(労働旬報社、1994年)、29-30頁。

8 今井小の実「女性の社会進出と社会事業の専門職化—アメリカの“ソーシャルワーク”の誕生を通して—」『評論・社会科学』87 (同志社大学社会学会、2009)、29頁; Catherine N. Dulmus and Karen M. Sowers, *The Profession of Social Work: Guided by History, Led by Evidence*, (John Wiley & Sons, Inc, 2012); 木原活信『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究—ソーシャルワークの源流』(川島書店、1998年)、23-25頁。

I ジェーン・アダムズについて

アダムズはその人生で様々な功績が認められている。特にシカゴにあるハル・ハウス（Hull House）でのセツルメント運動がよく知られている。また女性参政権運動や平和運動でも精力的に活動を重ね、1931年にはノーベル平和賞を受賞した。

本章ではまず、アダムズの生い立ち、ハル・ハウスでの福祉実践、国際的な平和運動を概観する。続いて、アダムズの福祉実践及び平和運動に関する先行研究を確認する。

1. 生い立ちと実践

本節ではジェーン・アダムズの生い立ちとアダムズによるセツルメント運動、女性参政権運動、そして第一次世界大戦開戦以降、アダムズが晩年まで精力的に取り組んだ平和運動について概括する。

ジェーン・アダムズは、1860年、イリノイ州シダービルにて、製粉業などで成功した資産家の裕福な家庭に誕生した⁹。アダムズが敬愛する父、ジョン・アダムズ（John H. Addams）の意向に従い、17歳でロックフォード神学校に入学する¹⁰。同校卒業後、アダムズは医師を志し、フィラデルフィア女子医科大学に入学する。しかし、幼いころから患っていた脊椎の障害の悪化により退学を余儀なくされる。その後、2度に亘ってヨーロッパを遊学し、2度目のヨーロッパの旅行中に以前から構想していたセツルメント運動に取り組むことを決意するに至ったとアダムズは述べている。そして1889年、29歳の時にハル・ハウスを設立した¹¹。ハル・ハウスが開設された当時の街の様子をアダムズは次のように記述している。

ハル・ハウスはポーク・ストリートの角に隣接するサウス・ハルステッド・ストリートに立っている。[...]ハル・ハウスはかつて郊外に位置していたが、街が着実に拡大し、今ではその周囲は、およそ3、4つの異なる外国人居住

9 Jane Addams, *Twenty Years at Hull House: With Autobiographical Note*. (New York: The Macmillan Company, 1911) (=ジェーン・アダムズ (柴田善守訳) 『ハル・ハウスの20年—アメリカにおけるスラム活動の記録—』 (岩崎学術出版社、1969年); James D. Allen, "Jane Addams (1860-1935): Social Worker and Peace Builder," *Social Work & Society*. Volume 6, Issue 2 (2008): 374-379.

10 アダムズ自身は当初、スミス女子大学 (Smith College) に入学することを望んでいた。Addams *Twenty Years at Hull House*, 43.

11 Addams, *Ibid*, 65, 85-87.

地のコーナーによって占められている。〔…〕この区の人口は約5万人で、最近の大統領選挙での有権者は7072人が登録されていた。そのことに関連する政治的スキャンダルは無かったものの、概して、その区の市議会議員は酒屋の経営者で、卑小な政治家の行動が監視されていない混雑したその区において、その政治的操作が存在した。公的機関の主導権を行使せず、その義務を果たすように要求されることを待つという方針は、市民が主導権を持たないその区においては重大事であった。〔…〕通りは説明できないほど汚い、学校が足りない、工場に関する規制が敷かれていない、街灯は少ない、路地や小さな通りの舗装は悲惨で全体的に不十分、加えて馬小屋は公衆衛生に関わる法律にことごとく違反している。何百もの家屋は下水道に繋がっていない。古参で裕福な住人は、できる限り早く引っ越したいと不安そうにしている¹²。

上記のような環境に加え、ハル・ハウスの傍には買春街があり、その当時のシカゴは産業の発展とは対照的に、スラムと化していた¹³。このような状況があり、セツルメント運動を必要とする人々がそこにいたため、アダムズに言わせれば、セツルメント運動をすることは「当然のこと」だったのだ¹⁴。

セツルメント運動は、19世紀後半から20世紀前半にかけてのアメリカの革新主義時代を背景に全米で盛んに取り組まれた¹⁵。その活動は、知識をもつ者や裕福な者がスラム街などに定住して貧しい人たちと人格的接触を伴う共同生活を形成し、その場を拠点として近隣の住民の社会教育や地域の社会改良を図るというものだ¹⁶。セツルメントの構成員を「レジデント」と呼び¹⁷、セツルメントの近隣のスラム街に住む人びとは「隣人 (neighborhood)」と呼ばれた。

ハル・ハウスでの活動は多岐に渡り、ハル・ハウスへとやってくる隣人たちのニーズに合わせて柔軟に行われた。特に移民、女性、子ども、高齢者を対象とした実践に力が入れられた。ここでアダムズが行った実践は、現在ではソーシャル

12 Jane Addams, "The Objective Value of A Social Settlement," in *Philanthropy and Social Progress: Seven Essays* (New York: Thomas Y. Crowell & Company, 1893), 27-29. 筆者訳

13 Ibid., 27.

14 Addams, *Twenty Years at Hull House*, 109.

15 Ruth Hutchinson Crocker, *Social Work and Social Order: The Settlement Movement in Two Industrial Cities, 1889-1930* (Urbana: University of Illinois Press, 1992).

16 木原『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究』37、158頁。

17 前掲註、159頁。

ワークの先駆として認識されている¹⁸。

アダムズは女性参政権の獲得に力を注いだことでも知られている。ハル・ハウスの実践で既に名が知られていたこともあり、女性参政権運動においても、牽引的な立場であった。例えば、1913年3月3日に行われた女性参政権パレードの開催に際して、全米女性参政権協会（National American Women Suffrage Association、NAWSA）とその内部組織である、議会委員会（Congressional Committee、CC）との活動案の策定の仲介役を行なうなどしている¹⁹。

1914年に第一次世界大戦が開戦してからは、精力的に平和運動を行うようになる。ヨーロッパ大陸で繰り広げられた戦闘に対して、当初、ヨーロッパ各地に祖先や親類を持つアメリカ合衆国の多くの人々の間では戦争の終結が願われていた²⁰。この頃までに国際的な女性参政権運動のネットワークを築いてきたアメリカ合衆国およびヨーロッパの女性たちは、元々、1914年に予定していた女性参政権について話し合う会議を翌年に延期した²¹。そして翌年の1915年にオランダのハーグで開催された国際女性会議（International Congress of Women）には、12の国々から1136名が参加した。アダムズはここで議長を務めた。この会議で彼女たちは、戦争を終わらせるための仲裁や、究極的には戦争の根本原因を根絶することを目標とした活動について議論した。この国際女性会議が後に名称を変更した団体が、世界で最も古い国際フェミニスト平和運動団体である、婦人国際平和自由連盟（Women's International League for Peace and Freedom、WILPF）である。アダムズはWILPFの初代国際会長に選出され、その平和運動が認められ、1931年にノーベル平和賞を受賞した²²。

2. 先行研究

本節では、ジェーン・アダムズの福祉実践及び平和運動に関する議論を確認する。

社会福祉の観点から、木原活信は、アダムズの個人史や時代状況がどのように

18 例えば、日本で一般的に用いられる社会福祉士の国家試験対策テキストにも、アダムズのハル・ハウスでのセツルメント運動が重要な出来事として記載されている。いとう総研資格取得センター（編）『見て覚える！社会福祉士国試ナビ2022』（中央法規出版、2021年）。

19 栗原涼子『アメリカのフェミニズム運動史——女性参政権から平等憲法修正条項へ』（彩流社、2018年）、31頁。

20 杉森長子『アメリカの女性平和運動史——一八八九年～一九三一年』（ドメス出版、1996年）、175頁。

21 前掲註、176頁；Women's International League for Peace and Freedom. "Our Herstory*," <https://www.wilpf.org/who-we-are/our-herstory/>（閲覧日：2022年9月20日）

22 Ibid.

ハル・ハウスでのセツルメント運動の実践と思想を形成したかを論じている²³。木原はアダムズの社会福祉実践思想について、アダムズ自身のライフヒストリー、宗教（クエーカー）の教え、社会福祉そのものの発展、などとの関連に注目する。さらに、アダムズの実践思想をソーシャルワークの文脈に位置づけ論じている。木原の研究はアダムズの実践思想を中心に展開されるため、同じくアダムズに大きな影響を及ぼしたであろう、女性参政権運動や平和運動に関する分析は範疇に含まれていない²⁴。

女性史研究として杉森長子は特にアダムズが牽引した女性平和運動に注目し、その活動とフェミニズムの「融合」を明らかにしようと試みる²⁵。ここで杉森は平和運動に取り組むアダムズの「エネルギーの源泉」を「女性固有の母性原理」と「女性の「無償の愛」」に見出している²⁶。しかし、この杉森の分析は女性が生得的な性質によって平和を志向すると断言しているようにも受け取れる。さらに言えば、男性が兵士や戦いと結びつけられることと対置させて女性を平和と結びつけるという、本質主義的・二元論にも陥りかねない。また、杉森の議論ではアダムズの平和運動の価値に重点を置くあまり、批判を含む多角的な検討が行われているとは言い難い。

ジェンダー視点から、特に第一次世界大戦時のアダムズの平和主義者としての在り方について考察した高村宏子は、当時のアダムズの平和運動の矛盾を指摘する²⁷。高村も杉森と同様にアダムズの平和運動とフェミニズム思想との関係について議論している。高村はアダムズのフェミニズムの論拠と平和運動は、女性がその性別役割として伝統的に担ってきた「幼児、弱者、老人」に対するケアという点で同一性をもった活動であったと分析している²⁸。高村はアダムズによる平和運動は、あくまで女性たちの日常や経験主義的な観点によって育まれてきた価値観に即して実行されたと考えた。

アダムズの平和運動とフェミニズムの在り方について、杉森と高村の見方には

23 木原『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究』

24 木原は自身の専門性に照らして分析枠組を設定しており、ジェンダー分析は当該研究においては行わないことを明記している。前掲註、16-17頁。

25 杉森長子『アメリカの女性平和運動史——一八八九年～一九三一年』（ドメス出版、1996年）。

26 前掲註、230頁。

27 高村宏子「第一次世界大戦とジェンダーに関する一考察——ジェーン・アダムズを中心として」『東洋女子短期大学紀要』31（東洋女子短期大学、1999年）99-117頁。

高村は国際平和を訴え、第一次世界大戦へのアメリカ合衆国の参戦に反対する姿勢を見せたアダムズが、その参戦後にはヨーロッパでの食糧不足の解消に貢献するための食料保存計画という愛国的な態度によって戦争を支える役目を担ったと分析している（110頁）。

28 前掲註、105-106頁。

相違が見られる。しかし、両者ともに、アダムズが平和を渴望し、その実現のために平和主義とその実践に徹したという理解は共通している。高村の場合は、第一次世界大戦時の連邦政府の「食糧保存計画」へのアダムズの協力という平和運動の限界を認めた上で、「将来の国際平和を見据えて一時的に現実的な路線を選んだ」と結論づけている²⁹。

エリザベス・アグニュー (Elizabeth N. Agnew) は、アダムズが初代国際会長を務めた WILPF のフェミニスト平和運動に注目する。戦争が人間にとって「自然なこと」だという、チャールズ・ダーウィン (Charles R. Darwin) の社会進化論を歪曲した戦争賛成派の主張への反論として、アダムズ自身も「社会進化論 (social evolutionary theory)」に沿って、同種間で争うよりも協力関係を築くことが社会の発展にとって重要かつ自然であると訴えた。さらに、女性がケアを通して得た人間の生命や生活に対する特別な感受性 (sensitiveness) を「母細胞 (mother cell)」というメタファーを用いて訴えた。同様にそれは、「母細胞」分裂という生命の発達になぞらえた、平和主義者の社会変革への推進力のメタファーとしても用いられた。このようにして、アダムズは戦争反対の女性運動を鼓舞した。平和の議題を検討する会議の場でアダムズのこの考えは無批判に受け入れられたわけではないが、そうしたアダムズの影響も受けながら、「実践における平和主義 (pacifism in practice)」が WILPF の活動を表わす概念とされたことを論じている³⁰。

木原、杉森、高村、アグニューは、それぞれ社会福祉やジェンダーの視点からアダムズの実践を分析している。木原はソーシャルワークの先駆としてのアダムズのハル・ハウスでの実践の重要性、高村はアダムズのフェミニズム思想の形成の背景にハル・ハウスでの実践があったことを言及してはいるものの、両者の議論はアダムズの福祉実践と平和運動の関係を明示的に論じてはいない。杉森とアグニューはアダムズの国際的なフェミニスト平和運動に着目したが、両者の議論ではアダムズの福祉実践との関連までは分析されていない。木原はアダムズの世界福祉実践と平和運動を個別の活動として論じている。しかし、人々の生命及び生活を守るという両者の実践及び活動の共通点に注目することで、より包括的かつ有用な議論を展開することができるのではないだろうか。

本稿は、以上の点を踏まえながら、アダムズのハル・ハウスでの福祉実践と平和運動をジェンダー視点から分析することによって、社会福祉と平和・安全保障

29 前掲註、109、113 頁。

30 Elizabeth N. Agnew, "A Will to Peace: Jane Addams, World War I, and "Pacifism in Practice," *Peace & Change*, Vol 42, No. 1 (2017): 5-31.

概念の関係について明らかにする。

II フェミニスト視点の平和・安全保障の議論

アダムズの福祉実践を分析する前段階として、本章では現実主義 (realism) に立つ伝統的安全保障の議論と、社会の性差別構造を問題とし、ジェンダー分析を用いるフェミニストたちによる平和・安全保障の議論を整理する。

1. 伝統的安全保障とフェミニストによる安全保障の再定義

国際安全保障研究は冷戦期に登場した。国際関係論の主要な一部を成す研究分野である³¹。その分野では現実主義に基づいた安全保障議論が今なお強い影響力を有している。現実主義に基づく安全保障議論とはどのようなものか。松元雅和は現実主義を「国際関係を各国の安全保障をめぐる権力闘争として描こうとする、世界観の一種」と表わす³²。その世界観を構成する特徴的な4つの見方が(1)世界は中央政府が存在しない無政府状態である、(2)国際関係におけるアクター(行為主体)は国家である、(3)無政府世界において、国家の最大の目的は生き残りとなる。したがって、国家安全保障は国際関係の最優先課題となる、(4)パワーは、この目的を達成するための重要かつ、必要手段である、というものだ³³。このような現実主義に基づく安全保障の議論は、国家中心的で軍事力の保持を前提とする。

そのような現実主義の国家安全保障議論への異議を、ジェンダーの視点から投げかけたのが、フェミニストの国際関係論や平和研究者たちである³⁴。彼女たちは、国家 (state) を中心とする安全保障ではなく、地球上で生活するすべての人々のためのグローバルな安全保障の追求を目指した。例えば、国際関係論において、アン・ティックナー (J. Ann Tickner) はフェミニスト視点で安全保障の再定義を試みている。その際にティックナーは、1985年にカナダのハリファックスで開催された国際女性会議 (International Congress of Women) に出席した女性たちの視点に注目している。一言で女性と言っても、それぞれの立場によって何を安全保障の課題とするかは異なる。しかし、この時、どの女性もが「安全保障

31 Buzan & Hansen, *The Evolution of International Security Studies*, 1.

32 松元、153頁。

33 前掲註、140頁。

34 安全保障に関する議論は国際関係論だけではなく、平和研究においても活発に議論される。安全保障 (security) は、伝統的な安全保障研究と平和研究の両者の分野を架橋させる概念である。Buzan & Hansen, *The Evolution of International Security Studies*, 102.

が誰かの不安全 (insecurity) の上に築かれるのであれば、それは意味を成さない」という共通認識を示した³⁵。このことは、フェミニスト研究者たちが戦争を含む安全保障政策が人びとの日常生活に与える影響に注意を払ってきたことと関係している³⁶。女性の経験を踏まえて再定義された安全保障とは、国際関係に止まらず私的関係をも含む多様なレベルの関係を考慮し、かつ、暴力の範囲を物理的・構造的・生態学的という多元的な視野で捉えたものである³⁷。

フェミニスト平和教育研究者のベティ・リアドン (Betty A. Reardon) は、女性の視点から、グローバルな安全保障の4つの必須条件を提示している。それは、(1) 生命が維持される地球環境、(2) 生存に必要な最低限のニーズの充足、(3) 人間の尊厳および人格が尊重され、個人の安寧と福祉、個人的または社会的な発達の可能性が伝統的慣習、社会構造、あらゆるレベルの政策によって侵害されない、(4) 人災から守られ、災害が起きた時には更なる被害に遭うことのないようケアされ、地球上の人々の生活や「安寧と福祉 (well-being)」が不均衡な安全保障政策や戦争の準備、武力紛争の影響によって脅かされないこと、である³⁸。リアドンは、これらの必須条件を維持・発展させることが平和であると考えた。

2. 女性性に基づく安全保障概念——他者に対するケアの責任

フェミニストたちは、現在の安全保障の策定過程が男性に支配されており、そこでは男性性に重点が置かれ、女性の経験が反映されていないと指摘する³⁹。そしてフェミニストたちは、周辺化され、力を奪われてきた個人々の不安全 (insecurity) にどのように国際政治が作用してきたかを分析する⁴⁰。

女性が安全保障の意思決定から排除される問題性を、リアドンは女性が他者をケアする役割に従事してきた点に注目して説明する。女性が求める安全保障とは、幼児、高齢者、障がい者などの、自らの生存を女性たちのケアに依存する、「脆弱性をもつ人々 (vulnerable populations)」の「安寧と福祉 (well-being)」が守られることである。であるならば、彼らをケアする立場の女性たち自身の「安寧と福祉」が保障されなければならない。女性の安全保障は、彼女の存在に依存す

35 Tickner, *Gender in International Relations*, 55. 筆者訳

36 Wibben, *Feminist Security Studies*, 21.

37 Tickner, *Gender in International Relations*, 23.

38 Betty A Reardon, *Women and Peace: Feminist Visions of Global Security*. (New York: State University of New York Press, 1993), 22-23. 筆者訳

39 Tickner, *Gender in International Relations*; Tickner, *Gendering World Politics*, 21; Reardon, *Women and Peace*.

40 Tickner, *Gendering World Politics*, 3.

る人々の安全保障にも不可欠なのだ⁴¹。女性の視点を安全保障の議論に導入するためには、国家中心ではなく人間を中心とした議論の展開やジェンダー平等的な政策決定などへの抜本的な変革が必要だとリアドンは主張する。

サラ・ルディック (Sara Ruddick) は、女性のケア役割、特に子どもを育てる「母親をすること (mothering)」の実践に着目する。母親たちが、時には子どもに対して暴力をふるう危険性を孕んだ感情に葛藤しながらも、子どもをより良く育て上げようとする日々の実践で培われた知—「母親的思想 (maternal thinking)」—は、不和が起きた際に暴力を回避させ、関係の維持や和解を促すといった平和の思想となり得る、とルディックは説く⁴²。

ティックナーによる安全保障の再定義やルディックの「母親的思想」による非暴力の議論を踏まえ、岡野八代は、フェミニスト理論の中でも特に「ケアの倫理」と安全保障の議論との結びつきを考察する。私的な関係において営まれるケアが、慣習的に男性中心である安全保障の議論に対するオルタナティブを提示できるという点は注目すべきである⁴³。

本章で述べてきたように、フェミニストの目指す平和・安全保障とは、軍隊や軍事力に頼らない。安全保障はあらゆる生命を維持でき、かつ人権や人間の尊厳を尊重したものである。特に現在の男性中心的な安全保障の議論から疎外されている、社会的弱者の「安寧と福祉」を中心とした議論こそが重視される。

Ⅲ ジェーン・アダムズのハル・ハウスにおける福祉実践

以下では、前章で紹介したフェミニストたちによる議論を枠組としてアダムズの福祉実践を分析し、社会福祉と平和・安全保障の関係を考えてみたい。

アダムズの重要な福祉実践は、I章で述べたハル・ハウスでのセツルメント運動である。ここではハル・ハウスでの実践をカテゴリー別にみていきたい。

ハル・ハウスは、社会階層は相互依存のかつ相互関係にあるという見解に基づいて開設された⁴⁴。その活動内容は、ハル・ハウスの隣人たちとの相互関係を重視

41 Betty A Reardon, *Gender and Global Security: A Feminist Challenge to the United Nations and Peace Research*. (ジェンダーと地球環境規模の安全保障：フェミニストの立場から国際連合及び平和研究に対する問題提起)『国際協力論集』6 (1) (神戸大学、1998年)、56頁。

42 Sara Ruddick, *Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace* (Boston: Beacon Press, 1989).

43 岡野八代「批判的の安全保障とケア——フェミニズム理論は「安全保障」を語るのか?」『ジェンダー研究——お茶の水女子大学研究年報』第22号 (お茶の水女子大学ジェンダー研究所、2019年)、61-79頁。

44 Jane Addams, "The Subjective Necessity for Social Settlement," in *Philanthropy and Social Progress: Seven Essays* (New York: Thomas Y. Crowell & Company, 1893), 1.

し、彼らの必要 (needs) に応じて柔軟に変わっていった⁴⁵。活動についてこうした前提はあるものの、アダムズは、ハル・ハウスの活動を4つに分類している。それらは、(1)「社会的活動 (social activities)」、(2)「教育的活動 (educational activities)」、(3)「人道的活動 (humanitarian activities)」、(4)「市民的活動 (civic activities)」である⁴⁶。アダムズによる活動の分類とその傾向に従って具体的な内容を紹介する。

1. 「社会的活動」

セツルメント運動は、隣人たちが社会的表現を「解放」させるための一定の「豪華さ」を尊重しなければならない、とアダムズは言う⁴⁷。情緒ある慣習を持つ移民が多く居住しているというシカゴの地の利を生かしたセツルメントは、その隣人に対してより多様な活動ができるとアダムズは考えた⁴⁸。

そのため、ハル・ハウスでは移民に向けた活動が多く行われた。例えば、毎週土曜の夜はイタリア人の隣人たちをゲストに迎え、金曜の夜はドイツ人たちを対象にした集まりをもった。そこでは様々な困りごとの相談があり、アダムズたちはそれらに対応した⁴⁹。新しくやってきた移民の他に、英語が上手で環境にも馴染んだ外国人たちを対象にした活動も行われた。彼らの多くは日々の生活の中で出身国の文化から遠ざかり、同志意識の減少を感じていた。彼らのような人たちにとって、自由に使える音楽設備があり、出身国の文化への熱意を再び湧き起らせるような大きくて心地よい場があることに何よりの価値があったかもしれない。そして、レジデントたちにとっても、移民の存在は、無味乾燥な地区に歴史やロマンを持ち込んでくれるという点で役に立っていた⁵⁰。

同様の活動は、アメリカ合衆国生まれの英語を第一言語とする若い人々に向けても行われた。毎週月曜の夜は16歳以上の男女別のグループ活動が行われた。21時までは多くの文芸プログラムが実施され、それ以降から22時に帰宅するまでは、互いに談笑して過ごした。14歳から16歳のメンバーに向けた活動は毎週火曜の夜に開催された。彼らの多くは学校には通わず、既に働いていた⁵¹。若者に

45 Ibid., 23.

46 Addams, "The Objective Value," 33.

47 Ibid.

48 Ibid., 34. 当時のハル・ハウス周辺には、イタリア人、ドイツ人、ポーランド人、ロシア系ユダヤ人、ボヘミア人、カナダ系フランス人、アイルランド人や第一世代のアメリカ人の外国人居住区があったという。

49 Ibid., 36.

50 Ibid., 37-38.

51 Ibid., 38.

向けた取り組みはこのほかにも数多く行われた。

移民たちの出身国の文化を次世代へと継承することによって世代間の相互理解を促し、またアメリカ人に対してヨーロッパ移民の文化を伝える活動も行われた。その代表的な取り組みが「ハル・ハウス労働博物館 (Hull House Labor Museum)」である⁵²。アダムズによれば、この博物館ができたことによって、移民の女性たちは出身国で培った技術を発揮することができるようになり、彼女たちがその年齢で受けるに相応しい尊敬を得ることができた。ある一人のイタリア移民の女の子は、母親の機織りの技術の高さを知ることによって、以前は野暮だと思っていた母親の恰好に口を出さなくなったし、ハル・ハウスに別々の入り口から入ってきたのを同じ入り口から入るようになった⁵³。

ハル・ハウスでの社会的活動とは、そこに集った人同士が出会い、日々の困りごとの相談や、クラブ活動、気軽なお喋りから出身国の文化の継承を目的とした活動まで行える、地域の交流の場を提供する活動であった。

2. 「教育的活動」

ハル・ハウスの教育的活動は、すでに教育課程を終えた人々や将来のために学ぶ意欲のある人々に対して行われた。ハル・ハウスの隣人たちには健康上の問題や不幸な結婚生活、その他さまざまな理由のためにスラムに住んでいたが、教育を受け、教養がある人々もいた。そのような人々にとって、ハル・ハウスは知的生活と接触できる場であった⁵⁴。

教育的活動の代表的な取り組みは、ハル・ハウスで行われた、「大学拡張講義 (the College Extension course)」であった。レジデントが主催した非公式の読書クラブとして始まった講義は、数を増やし、夜に一連の講義が行われるようになった⁵⁵。数は限られていたものの、産業教育活動として料理教室や裁縫教室が行われた⁵⁶。

ハル・ハウスは芸術活動の拠点としての役割も果たした。1891年6月には、ロンドンのトインビー・ホール (Toynbee Hall) でセツルメント運動を行っていたバーネット夫妻 (Samuel Barnett & Henrietta Barnett) の協力を得て絵画の展示を行った⁵⁷。また、ハル・ハウスのスタジオでは絵画教室が開かれ、才能あ

52 Addams, *Twenty Years at Hull House*, 235-236.

53 Ibid., 243-245.

54 Addams, "The Objective Value," 39.

55 Ibid., 40.

56 Ibid., 44.

57 Addams, *Twenty Years at Hull House*, 371.

る若者や、忙しい日常の中での楽しみや自己表現の方法をそこに見出した女性たちなどが通った⁵⁸。他にも歌のコンサートや子ども向けの音楽教室、演劇の上演などが行われた。それらを通じて子どもたちは自分たちに所縁のある移民の曲を学んだり、レクリエーションや教育のためだけでなく、自己表現のやり方を学んだりした⁵⁹。

また、ハル・ハウスの開館当初から、幼稚園が開設され、毎朝、子どもたちが訪れてきていた。この後には保育所も開設された。

教育的活動とは、人々に知的交流や生涯教育の機会を提供したり、子どもたちの発達を促進したりするための活動だったと言えよう。

3. 「人道的活動」

ハル・ハウスで移民に対する福祉活動を数多く行っていたことは既に述べた。とりわけ、新しく外国から来た人びとにとって、ハル・ハウスは情報収集の場であり、通訳を行ってくれる案内所でもあった⁶⁰。

地域コミュニティへの活動では、慈善活動団体が不足したシカゴで、ハル・ハウスでは救済基金を保持しておく役割を担ったり、ハル・ハウスの5つある浴場を隣人たちへ開放したりした⁶¹。また、ハル・ハウス開設2年目からは保育所を開設し、保育のトレーニングを受けた若い女性スタッフが責任者となった⁶²。保育所のすぐ裏のコテージでは「ハル・ハウス ダイエットキッチン (Hull House Diet Kitchen)」が設けられ、傷病者に配るための食事が用意され、地区の医師や訪問看護師たちからも注文を受けた⁶³。

教養のある女性たちによって女性クラブも結成され、公式なスピーチから気軽な議論までが楽しまれた。彼女たちはハル・ハウスの世帯経費を他の世帯と比較して、食費や燃料費についても議論したりした⁶⁴。

ハル・ハウスに隣接して建てられたコーヒー・ハウスでは隣人たちの台所として適切に調理された食事を販売し、彼らの家事負担や経済的負担を軽減しようとする取り組みもなされた⁶⁵。

人道的活動では、人々の健康や生活により密接に結びつくサービスの提供が行

58 Ibid., 373-374.

59 Ibid., 378, 387.

60 Addams, "The Objective Value," 45.

61 Ibid., 47.

62 Ibid.

63 Ibid., 48.

64 Ibid.

65 Ibid., 49.

われた。

4. 「市民的活動」

市民的活動に分類される活動の一つには、本来ならば行政で市民に適切に供給しなければならないサービスの不足を指摘し、その実現を求める活動が挙げられる。例えば、児童数に対して公立学校が不足していたために、公立学校増設を教育委員会に要求したこと、街路の状態について2か月間調査し、その結果を保健省に提出して街路清掃サービスと区の家畜小屋に関する規制の改善が認められたこと、などがある⁶⁶。

労働運動との関わりも市民的活動に含まれる。1920年に連邦憲法修正19条が成立し、女性参政権が認められるまで、女性には参政権がなく、政治への意思表示の手段は限られていた。アダムズはそうした状況下の女性労働組合の活動の重要性を強く意識し、ハル・ハウスは定期的にその集会場所となっていた⁶⁷。アダムズやハル・ハウスが支援したのは女性労働者だけではない。労働者たちのための社会科学クラブもハル・ハウスで毎週開催されていた⁶⁸。このクラブでは社会主義や労働運動についての議論が交わされた。これらの活動によって初期のハル・ハウスは過激な社会主義者の集まりとして見なされるようになった⁶⁹。この活動は後にハル・ハウスを政治と社会の両面から労働問題と繋げるようになる。

加えて、ハル・ハウスでは夫から捨てられた女性たちへの支援や夫を亡くした女性たちのために保険の手伝い等の法的な仕事にも取り組んだ。

ここで提示した4つの活動内容は、いずれもアダムズたちが行った地域コミュニティへの福祉実践である。しかしこれらの活動は、ハル・ハウスのレジデントのみが行ったわけではなく、隣人たちの惜しみない協力によって支えられていた⁷⁰。ハル・ハウスでの福祉実践は、レジデントや隣人という一応の区別はあるものの、そこに集った人々の相互協力的な関係によって成り立つものであった。

66 Ibid., 50.

67 Ibid.

68 Ibid., 52. アダムズは社会科学クラブについて社会的・教育的・市民的活動という領域横断的な性格があったと振り返っている。

69 Addams, *Twenty Years at Hull House*, 183.

70 Addams, "The Objective Value," 49.

IV ジェーン・アダムズのフェミニスト平和運動

本章ではアダムズの平和運動の内容を見ていきたい。

まず、振り返っておかなければならないのは、アダムズと女性参政権運動との関わりである。アメリカ合衆国における女性参政権運動は、第一波フェミニズム運動としても知られている。アダムズを含めたサフラジェットたちの多くは平和運動にも積極的に取り組んだ。

アメリカ社会と政治の進歩的な機運が高まりを見せるなかで、女性が男性と同等に政治に参加する権利を主張したのは当然の流れだっただろう。アダムズは女性が家庭で担ってきたケアの役割が、環境整備などの市政運営においても有用であると考え、女性が参政権を持つ意義を主張した⁷¹。

第一次世界大戦が開戦した当時、すでに参政権運動の国際ネットワークを築いていたことから、ヨーロッパの女性参政権運動家らの要請に応え、アメリカ合衆国でも戦争に反対する女性団体の発足が急がれた。そこで1915年1月に結成されたのが、アダムズが率いた女性平和党 (Women's Peace Party: WPP) であった⁷²。

1915年にオランダのハーグで開催された国際女性会議にはアメリカ合衆国からは47名が参加し、そのほとんどをWPPのメンバーが占めていた⁷³。会議に参加した12か国の代表者たちは皆、女性参政権の獲得をめざすサフラジェットたちであった。彼女たちの全員が平和的手段によって国際紛争を解決できると信じていた⁷⁴。

1916年12月に開催されたWPPの3度目の年次総会からは、戦争が長引くことにより予想される、世界での食糧不足が問題関心となった。1916年は全世界的に不作の年ではあったものの、アダムズらは戦争そのものが加速する食糧不足の主たる責任を負っていると考えた⁷⁵。戦争のために動員される人々の中には元来、食糧生産や輸送に携わる人々があり、戦争が農業や産業を止めてしまうからだ⁷⁶。

大戦の開戦以来、アダムズの参加したWPPや国際女性会議などの平和運動は、

71 Jane Addams, *Newer Ideals of Peace. With an Introduction by Marilyn Fischer*, Jane Addams's Writings on Peace (England: Thoemmes Press, 2003), 91-92.

72 Jane Addams, *Peace and Bread in Time of War. With an Introduction by Marilyn Fischer*, Jane Addams's Writings on Peace (England: Thoemmes Press, 2003), 11.

73 Ibid., 14.

74 Ibid., 15.

75 Ibid., 19-20.

76 Ibid., 20.

中立国が交戦国同士を仲介し、対話外交によって停戦をするべきだと訴えてきた。アメリカ国内では、中立を維持するとしていたウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) 大統領にアメリカ合衆国が中立国としての役割を果たすことを求めた⁷⁷。だが、そのようなアダムズの活動も空しく、1917年、ウィルソン大統領は第一次世界大戦へのアメリカ合衆国の参戦を決定する⁷⁸。アメリカの参戦以降、メディアのプロパガンダなどによって、平和主義者への風当たりが厳しくなり、アダムズは積極的な平和運動を続けていくことが困難になった。

そのような状況の中で、アダムズはハーバート・フーバー (Herbert Hoover) の指揮下にあった連邦政府の食品管理部の後援で、食糧保存についての講演をするよう依頼された⁷⁹。この活動であれば反発もなく、平和主義や人道主義に適合すると考えたアダムズは、講演活動を各地で行うようになった。この活動でアダムズが特に意識したのは女性組織に向けての講演であった⁸⁰。そこで、女性達にその知恵を用いて豊富に食べ物を産出し保存するということがヨーロッパの食糧危機を救うため、いかに意義深い行いかを訴え、その協力を呼び掛けようとした。加えてその活動に従事してもらうことで、女性達が戦意を高揚させることを防ごうとした⁸¹。また、アダムズは食糧保存という女性的な仕事が女性たちの伝統的な役割と食料生産者という歴史的な背景に適合していて、かつ今まで女性の領域と考えられてこなかった国際情勢に食糧供給を通して女性が参加できると考えた⁸²。これらのことから、アダムズはヨーロッパにおける食糧難の問題に熱心に取り組んだ。

WPP や国際女性会議が女性参政権運動を背景にした平和運動である一方、アダムズは自らのセツルメント運動の経験とそれによって得た確信を抛り所に平和を捉え、反戦を支持していたのではないか。それを示す例として、第一次世界大戦が開戦した1914年の秋にニューヨークで開催された、ソーシャルワーカーたちによる戦争への対応を考える会議が挙げられる。会議の様子を振り返り、アダムズは次のように述べている。

ヘンリーストリート・セツルメントでのグループ会議のメンバーの多くは、アメリカ市街の国際的な地区に住んでいた。多様な国々からの移民たちの中で長い実践経験を通して、私たちのメンバー全員がすべての人々たちの間

77 Ibid., 16-17.

78 Ibid., 39.

79 Ibid., 45-46.

80 Ibid., 46.

81 Ibid.

82 Ibid., 47-49.

で友好的で協力的な関係性が絶えず可能になりつつあると確信していた。武力によって目的を果たそうとする戦争が、全人類を包括するような友好的協力関係を構築するプロセスを中断させるだけでなく、致命的に逆行させてしまったのだ⁸³。

異なる文化や背景を持つ移民との関係を築いたセトルメント運動を通して、武力による秩序の構築ではなく、違いを認めた上での協力関係こそが肝要だと考えていたことを示している。

第一次世界大戦が終結した翌年の1919年に、第2回国際女性会議がスイスのチューリッヒで開催された。この会議で国際女性会議はWILPFへと名称変更し、アダムズは初代国際会長に選出された。アダムズはこれ以降、終生、国際的な平和運動に取り組み、1931年にはアメリカ人女性として初のノーベル平和賞を受賞した⁸⁴。第一次世界大戦中、アメリカ合衆国のメディアは愛国的なプロパガンダとして、平和主義者に対する歪曲報道や中傷を行ない、アダムズやハル・ハウスもその標的とされた⁸⁵。「戦時中、平和主義者たちは、自身の政治的判断を仲間から支持されたいという当然の願望を満たすことに文字通り飢えていた」とアダムズは当時のことを振り返っている⁸⁶。このような逆境を経験した後に、アダムズの平和運動の功績がノーベル平和賞の受賞により公的に認められたことは、アダムズ自身にとっても、アダムズと共に反戦を謳い、活動した平和運動家たちにとっても意義深い出来事であったと言えよう。

V 社会福祉とフェミニスト平和・安全保障

ここまで見てきたジェーン・アダムズのハル・ハウスでの福祉実践と、国際的な平和運動の活動から、社会福祉と平和・安全保障の議論をどのように繋ぐことができるのかについて考えてみたい。

第一に、アダムズの福祉実践と平和運動との共通点として、「相互関係」を挙げたい。移民が多く居住したシカゴのスラム街でのセトルメント運動は、アダム

83 Ibid., 10. 筆者訳

84 アダムズは1919年から1935年に彼女が亡くなるまでWILPF国際会長を務めた。1920年代初頭には日本を含むアジアを歴訪し、1923年の日本滞在期間中には、日本の社会事業家や婦人参政権運動家たちにも少なからぬ影響を与えた。Judy D. Whipps, "Jane Addams's Life and Thought," in *Peace and Bread in Time of War*. (England: Thoemmes Press, 2003), viii, x; 木原『J. アダムズの社会福祉実践思想』、第10章。

85 Addams, *Peace and Bread*, 74.

86 Ibid., 81. 筆者訳

ズの人間関係を捉える視点に影響を与えていたことがわかる。出身国の違いによって様々な背景を持つ移民たちがハル・ハウスを訪ねてくることで、彼らがアメリカでの生活様式を知ることと同等またはそれ以上に、レジデントであるアダムズたちが移民について学んだ。その一例に、「ハル・ハウス労働博物館」が挙げられる。博物館が果たした役割は、移民の世代間での文化の継承に止まらない。アダムズらアメリカ人も、移民たちがそれぞれの文化で磨き上げてきた産業技術を目の当たりにすることで、相互理解を深めることにもなったのである⁸⁷。また、ハル・ハウスは、レジデントが隣人たちの生活を観察するだけの場ではなく、地域の社会拠点として、隣人たちがレジデントを観察する場でもあった。それを示す例にⅢ-3の女性クラブの活動が挙げられる。アダムズと同時代の社会事業家、メアリー・リッチモンド (Mary Richmond) が所属した慈善組織協会 (Charity Organization Society, COS) の活動の一環であった「友愛訪問」では得られない、「訪問されること」で培われたものこそが、アダムズが重視した「相互関係」といえるだろう⁸⁸。隣人との間での相互的なやり取りをした経験がアダムズの平和運動にも反映されているのではないか。そのことは、Ⅳで言及した戦争に反対するソーシャルワーカーたちの会議での国際的な相互理解と協調関係という共通意識にも表われているだろう。

第二に、実行可能で実用性がある、プラクティカルな平和運動をアダムズが展開したこととアダムズの福祉実践との繋がりを見ることができるだろう。アダムズは、戦時中に自身が置かれた状況を次のように振り返っている。

私の気質や習慣は、常に私を中道でいさせた—社会改良と同じく、政治においても、私は「可能な限り、最善 (the best possible)」を尽くしてきたのである⁸⁹。

このアダムズの考えがよく表れているのが、第一次世界大戦中、平和運動として行った食糧保存を呼び掛ける講演活動だろう。平和運動で指導的な立場であったが故にメディアから攻撃され、戦時中は平和主義者としての主張を徐々に控えざるを得なかったアダムズが、その時々で行い得る最善を尽くしたと考えられる⁹⁰。高村が述べたように、厳密に言うところの活動は戦争協力にあたるかもしれな

87 Addams, *Twenty Years at Hull House*, 235-236.

88 アダムズ自身も COS の「友愛訪問」の活動を意識して、「訪問されること」の必要性について述べている。Addams, "The Objective Value," 48.

89 Addams, *Peace and Bread*, 73. 筆者訳

90 Ibid., 77.

い。しかし食糧を供給するという、女性的かつ人道的行為であるという点から、「一時的に現実的な路線を選んだ」とは言えないか。

状況に応じたこのプラクティカルな平和運動は、隣人らの必要に応じて、レジデントらによる調査や、彼女らが担い得る支援の限界を認めた上で実施されたハル・ハウスでの福祉実践の方針と重なるものである。そして、食糧を供給するという活動は、人間にとって最も基礎的なニーズを満たすという点において非常に実用性の高い活動だったと言えよう。アダムズの実践で「可能な限り、最善」という信条は重要であり、現実には即した「プラクティカル」な実践は福祉実践と平和運動の両者を繋ぐ重要な概念だと言えよう。

第三に、他者に対するケアの責任が、福祉実践と平和運動の共通点として挙げられる。これは先に挙げた二点とも関連する共通点であり、それゆえ最も重要な点である。ハル・ハウスでの対人支援は当然のことながら大きな責任を伴う。実践の分類の中でも特に人道的活動は、隣人たちの身の安全や健康に直接、関わる。このような実践では、サービスを供給する者と受ける者の間にはどうしても権力関係が生じる。ルディックが「母親をすること (mothering)」の実践を例として指摘したように、他者のケアに携わる活動は、それ自体が暴力に転じる可能性をも秘めている⁹¹。決して他者への侵害にならないよう、だが必要とされているケアを全うすることができるように、「相互関係」に気を配り、「プラクティカル」にケアを実践することが求められる。

食糧保存を訴えるというアダムズの第一次世界大戦中からの平和運動でも、家庭で女性たちが担う食事を提供する役割、すなわち、生命維持にとって不可欠なケアの責任が、その運動を行う動機や、その意義を示す根拠として強調されている。これはリアドンが提示した、グローバルな安全保障の必須条件の第一の条件とも共通している。さらに、リアドンに従えば、女性たちのケアに依存しなければならぬ人々へのケアの責任を果たせることが、平和・安全保障を考える上で欠かすことができない点なのだ。

以上の三点を踏まえると、アダムズにとってのハル・ハウスでの福祉実践と、晩年まで取り組んだ国際的平和運動は同様の動機によって行われていたとは考えられないか。一方は地域コミュニティでの活動であり、もう一方は国際社会での活動である。アダムズにとっては、いずれの活動も、「相互関係」、「プラクティカル」な実践、「他者に対するケアの責任」という観点からの活動であったのではないか。これら3つの概念に照らして考えれば、社会福祉と平和・安全保障とは、人々の生命・生活・財産を守るという役割や目標において多分に重なり合う

91 Ruddick, *Maternal Thinking*, 73.

概念と言えよう。

アダムズの実践から導いた3つの概念からは、現実主義の軍事力を用いた国家中心の安全保障とは異なる平和・安全保障の在り様を示し得る。それは、各国間の協調関係を重視する。また、それは異なる背景を持つ人々を、軍事力を用いて威嚇すべき他者と見なすのではなく、相互理解を深めるべき「隣人」と見なす。さらには、地球の構成員すべての生命と生活、「安寧と福祉」を守ることを最重視するものである。

おわりに

本稿では、人々の生活の安全・安心を守ることに重きを置く、フェミニスト平和・安全保障のあり方を考えるにあたり、アメリカ合衆国のフェミニスト活動家、ジェーン・アダムズのハル・ハウスでの福祉実践と、国際的な平和運動の分析を行った。そして、その分析から社会福祉と平和・安全保障の議論がどのように接続できるのかを検討してきた。

社会福祉と平和・安全保障の議論を接続する、(1)「相互関係」、(2)「プラクティカル」な実践、(3)「他者に対するケアの責任」という、3つの概念を提示した。社会福祉と平和・安全保障の両方に跨る、これらの概念を導き出すにあたって重要であったものこそが、ジェンダーの視点、女性の経験や価値観に基づく社会という認識論である。

アダムズが福祉実践と平和運動で一貫して重視してきた、女性の経験・視点および女性性の価値を社会や政治に反映しようという試みは、まさにフェミニストたちが論じてきた、ジェンダー視点に基づく平和・安全保障の考えを行動化したものである。リアドンの議論に倣えば、アダムズは人々の生活のニーズに応え、その「安寧と福祉」を維持、発展させる活動、すなわち平和に無意識ではあっても日々、従事していたということだ。アダムズの福祉実践と平和運動は、現在のフェミニスト平和・安全保障の思想と実践に大きな示唆を与えるものである。

ABSTRACT

Interrelation between Social Welfare and Feminist Concepts of Peace and Security: Analysis of the Practices of Neighborhood Services and Peace Movement of Jane Addams

Miki Aikata

Feminist concepts of peace and security have gained more interest in recent years particularly as a critique of the traditional realist view of national security, arguing that the focus of security needs to be more inclusive than the military-centered view of traditional national security. Feminist views of peace and security place an emphasis on assuring well-being and safety of people. In the feminist view of peace and security, there seems to be a connection between what is understood as social welfare and what is often treated as peace and security issues. The article tries to explore the connection by looking at the works of Jane Addams, the American feminist, social worker, and peace activist, who spearheaded the settlement movement in the United States and led the international feminist peace movement.

Existing academic research on Addams seldom touches upon the connection between the two categories, social welfare and peace, or how they might have influenced each other. This separation is also seen in many descriptions of Addams' contributions and accomplishments as an activist. Thus, it is an intention of this paper to shed light on the interrelations between Addams' social welfare activities of Neighborhood Services and international peace movements for deepening the discussions on feminist perspectives on peace and security. Specifically, the article looks at the activities of Hull House established by Addams and her colleagues in Chicago in 1889 and the meaning of their activities described by Addams herself. For international feminist peace movement that Addams was engaged in, the article introduces Women's Peace Party, International Women's Congress and Women's International League for Peace and Freedom, and her other lectures during World War I.

This article employs an analytical framework devised by feminist researchers in feminist epistemologies grounded in women's values and life experiences. It highlights two aspects: redefining security from feminist perspectives; and caring responsibility for "others" such as infants, the elderly and the sick. Such analysis reveals three concepts which may be understood as connections between social welfare and peace and security in the practices and activities of Addams: "reciprocal relationship"; practicality; and caring for others.

In conclusion, the article reiterates the significance of a gender perspective for better understanding the interrelation between social welfare and peace and security.